

[論文の内容の要旨]

日本民俗学を創出した柳田國男は自らの学問を「民間伝承の学」と称していた。柳田國男の学問の獨創性は、生活世界には文献資料からだけでは明らかにならない膨大な歴史事実が存在することを明らかにし、日常生活のなかで伝承されてきた事象を分析する手法を学問として確立させたことである。

一方で、日本民俗学が大学教育に組み込まれ、民俗学教育という課程が形成されていく過程で、柳田の確立した方法論は批判され否定されていくことにもなった。

本論文はこうした日本民俗学史の展開を検証することで日本民俗学の初志を確認し、民俗学の主要概念である「伝承」を、現代社会における共同体の自治の喪失という課題に対して、新たな「共」的自治を回復する資源として位置付けようとしたものである。

本論文は、序章と終章を除いた第1章から第9章までを三部に分けて構成しており、そのうち8つの章については日本民俗学に関する学会誌等に掲載された査読付き既発表論文を基にしている。構成は以下のとおりである。

序章 本研究の問題意識と課題

第1節 本研究の問題意識

第2節 伝承研究の課題

第3節 アプローチの方法と本研究の構成

第1部 伝承概念再考

第1章 伝承をめぐる研究史

第1節 『民間伝承論』以前

第2節 柳田國男の伝承観と伝承母体論

第3節 現代民俗学と伝承

小 括

第2章 伝承概念の脱／再構築のために

第1節 伝承をめぐる二つの立場

第2節 「凍結」される伝承と行為論的伝承論

第3節 伝承概念の可能性

小 括

第3章 伝承研究の現代的課題—柳田國男による自治論の再検討

第1節 現代社会のシステムと伝承

第2節 柳田國男の自由主義批判

第3節 眼前の事実としての自治

小 括

第2部 伝承の仕組みと動態をめぐる考察

第4章 役割交替と伝承の相関性—主婦権とトウヤのワタシ儀礼周辺から

第1節 役割交替について

第2節 ワタシの儀礼

第3節 伝承母体と伝承の変化

小 括

第5章 伝承意識と伝承の変化—芸予諸島・鵜島の氏神祭祀を事例に

第1節 芸予諸島・鵜島の概要

第2節 鵜島・宇佐八幡社の神祭

第3節 氏神祭祀と伝承意識

小 括

第6章 伝承の仕組みと動態をめぐる考察—鵜島における”歴史”の構成

第1節 伝承の仕組みと動態をめぐる先行研究

第2節 鵜島の”歴史”

第3節 鵜島の”歴史”にみる伝承の実態

第4節 伝承の仕組みと動態をめぐる考察

小 括

第3部 現代社会と伝承

第7章 伝承の変化に見る高度経済成長期—千葉県浦安市の事例から

第1節 本章のフィールド

第2節 浦安の伝承

第3節 伝承の変化に見る浦安の高度経済成長

小 括

第8章 システムと伝承—平成の市町村合併を事例に

第1節 平成の市町村合併と新自由主義

第2節 民俗学の立場から

第3節 システムと伝承の関係性

小 括

第9章 伝承と自治の再生に向けて—震災被災地における中間集団と相互扶助

第1節 創造的復興と被災地の現状

第2節 地域社会の自律性

第3節 伝承と自治の再生の萌芽

小 括

終章 本研究のまとめと今後の課題

第1節 伝承概念の問題点と可能性

第2節 伝承の仕組みと動態性

第3節 近現代的状況下における伝承

第4節 本研究の結論

第5節 伝承研究の今後の課題

以下、章ごとに内容を略述する。

序章では、提出者の本論文の問題意識を説き起こすとともに、近年の民俗学で批判されている伝承概念の問題点を明らかにし、今後の民俗学における伝承研究の視座と目的、そして可能性を示すという研究の到達目標を明示している。

次いで、第1章から第3章を第1部「伝承概念再考」としており、伝承概念に関する先行研究を、伝承を「資料（存在）」として扱うものと、文化の伝達継承の「行為」として扱うものとに分類整理し、伝承概念の検証を試みている。

「第1章 伝承をめぐる研究史」では、伝承の研究史を整理し、この概念が抱える問題点と可能性の概要を示している。

「第2章 伝承概念の脱／再構築のために」では、前章で示した伝承概念の問題点がどのように生じたのかを明らかにし、その上で伝承研究の視座と目的を明らかにしている。

「第3章 伝承研究の現代的課題—柳田国男による自治論の再検討」では、柳田国男が伝承に見出した可能性を掘り下げて考察し、伝承研究の目的の1つが「自治」であったことを明らかにしている。

第2章と第3章との議論によって伝承が「歴史」と「自治」の2つの要素を内包する概念であることが示され、第3章における「自治」をめぐる議論は、現代社会における伝承の可能性を論じる「第3部 現代社会と伝承」での議論へと接続される。

第4章から第6章を第2部「伝承の仕組みと動態をめぐる考察」とし、第1部で示した「動態的存在としての伝承」の実態を具体的なフィールドワークによる事例を題材にして検証を行っている。第2部の基本的な分析枠組みは、特定の地域や集団の中で個人がいかにして伝承の主体になるのかを、「集団と個人の関係」から見ていくことであるとし、それぞれの章で「役割」、「伝承意識」、「世代交代」という概念を設定している。

「第4章 役割交替と伝承の相関性—主婦権とトウヤのワタシ儀礼周辺から」では、日本各地で伝えられてきた「〇〇ワタシ」と呼ばれる民俗語彙と儀礼に注目し、特定の個人、集団の役割交替が伝承と深く関わるものであることを示している。

「第5章 伝承意識と伝承の変化—芸予諸島・鶴島の氏神祭祀を事例に」では、瀬戸内海芸予諸島・鶴島で伝承されている氏神祭祀を事例として取り上げ、この島の人々が持つ「伝承意識」と「伝承の変化」とが共存している状況を明らかにした。この共存状況は伝承の持続と変化とが実は対立する問題ではないことを示唆しており、本章ではその実態を分析していくことで伝承の認識論的な対立を乗り越える新たな伝承観を提示している。

「第6章 伝承の仕組みと動態をめぐる考察—芸予諸島・鶴島における「歴史」の構成」では、前章に引き続き鶴島の事例を取り上げ、この島の人々の「世代交代」が伝承の動態にどのような作用をもたらすのかを検討している。伝承の仕組みと動態の要因を把握する分析視角について論じている。

第7章から第9章までを第3部「現代社会と伝承」とし、第1部で述べた「自治」をめぐる議論について、第2部で具体的な伝承の変化をとおして、私たちの生きる時代状況を検証したうえで、伝承にいかなる現代的な可能性があるのかを示す課題に取り組んでいる。具体的には、特定の地域の存在／行為としての伝承が市場経済の浸透や技術革新によって、どのように変化したのかを確認している。

「第7章 伝承の変化に見る高度経済成長—千葉県浦安市の事例から」では、千葉県浦安市の伝承の変化を分析することで、高度経済成長期の時代状況を描き出すことを試み、近代化と伝承との関係を考察した。

「第8章 システムと伝承—平成の市町村合併を事例に」では、近現代の時代状況特徴づける「システム」の問題を平成の市町村合併から考察し、伝承が「自治」の中で果たしていた（いる）機能を明確にすることを試みた。

「第9章 伝承と自治の再生に向けて—震災被災地における中間集団と相互扶助」では、東日本大震災の被災地の状況を事例としながら、前章で論じた「伝承と自治」が現代においてこそ問われるべきテーマであることを示し、その上で伝承の現代的な可能性を論じた。

終章では、第1部から第3部までの議論を総括し、システムと生活世界の伝承を対置することで私たちが生きる社会と時代の特徴を浮き彫りにし、それを相対化するものとして伝承を位置づけている。さらに、現代社会において伝承が「自治」の中で果たしていた（いる）機能を検証することで、「伝承と自治」とのつながりが現代においてこそ問われるべき課題であることを示している。

[論文審査の結果の要旨]

本論文の独自の論点は、民俗学の主要概念である「伝承」を、現代社会における共同体の自治の喪失という課題に対して、新たな「共」的自治を回復する資源として位置付けている点であろう。新自由主義的なシステムが生活世界を侵食する状況において、過去から伝えられた知識や技能である伝承の中に、生きる方法を探り、選び取る可能性を論じたものである。

本論文において評価すべき主要な点は、次の三点である。

第一点は研究目的に関する点である。本論文は、近年の民俗学で批判されている伝承概念の問題点を明らかにし、今後の民俗学における伝承研究の視座と目的、そして可能性を示す議論を行うことを目的としている。伝承概念の問題点とは、これを静態的な概念として捉える視点が存在することであり、この点が現在の伝承概念批判の論拠となっている。

本論文では、このような静態的伝承観が第二次世界大戦後の民俗学における基層文化論、民族性論などの影響によって構築されたものであることを明らかにしたうえで、伝承概念がもともと柳田国男によって動態的概念として提示されたものであることを確認し、伝承の動態性に着目することが、今後の伝承研究の基本となる視座であると論じている。日本民俗学が大学の教育課程に位置づけられていく過程で生じた民俗学の変容に関する課題について果敢に取り組んだ姿勢は高く評価できる。

第二点は研究方法に関する点である。第4章から第9章までの各事例分析は、精緻なフィールドワークを基にしたもので、被調査者との信頼関係を構築することで成し得た成果である。各論文執筆後も調査対象地への関心を持ち続け、論述した内容についての検証作業を継続するなどの努力を続け、主観的な分析に陥りがちな参与観察の手法の限界にも留意し、調査データの客観性を担保する作業を続けてきたことは、フィールドワークにおける科学的データ収集と分析の手法としても評価すべき点である。

第三点は考察内容に関する点である。本論文における伝承研究の目的は、その変化をとおして「歴史」を描くこと、そして生活世界の「自治」のあり方を考えることにあるとしている。前者の「歴史」とは、私たちの生活を変化させる様々な外部からの影響を能動的に取捨選択を行うための知識として本研究では位置づけている。これは後者の生活世界の「自治」を担保するものであり、「歴史」を理解することと生活世界の「自治」を理解することは不可分の関係にあるとしている。

さらに、伝承の持つ現代的な可能性についても言及している。現在は新自由主義的な政治・経済システムが生活世界に有形・無形の様々な影響を与えるかたちで浸透している一方で、伝承は生活世界の自律性を支えるものとして機能しており、またそれらのシステムに対する能動性を生み出すものであることを本研究では論じている。そして、システムは「公」と「私」という論理によって生活世界を区分するが、伝承はそこに「共」の領域を生み出すものであり、これが本研究で明らかにした伝承の持つ現代的な可能性であると結

んでいる。狭義の民俗学的研究を超えた、日常生活を総体的に捉えた分析として高く評価できる考察内容である。

いくつかの課題についても言及しておきたい。

第一点は伝承が動態的存在から静態的存在に変化した理由に関する考察についてである。その事由を民族性論や基層文化論だけに求めるのではなく、大学において民俗学教育を受けた人たちが担い手となって展開されることになる民俗文化財保護行政、大学教育における民俗調査のあり方などに関連づけて議論する必要があるだろう。民俗学関係者が等閑視してきた研究対象であるため、学界への貢献が期待される研究課題である。

第二点は伝承を自治の問題と関連づけて議論する点についてである。この観点は本論文の独自性を示す観点であるが、伝承が地域や個人の自律性を常に生み出す存在であるかという点はさらに検証作業が必要であろう。今後の研究において、人びとの日常的実践における伝承を用いて「システムを飼い慣らす」あるいは「システムと折り合いをつける」というような具体的な実践を明らかにするような調査研究がより一層なされることを期待したい。また同時に、「伝承」という存在や行為が無条件に現代社会において有益であると考えるのではなく、どのような伝承がどのような場面においてポジティブな潜在力を持つのかを冷静に見極め、そうした伝承をどのように現代社会に生かしていくかという方法を、現実に即して考察されることを求めたい。

第三点は伝承とシステムとの関係性に関する点である。本論文におけるシステムの概念は、国家、市場経済、マスメディアなど、異なる機能を有する事象を包括した構造として提示されている。そのために、結果として、日常生活の微細な調査と分析とを研究手法としながら、きわめてマクロな問題へと結論が短絡しているような印象を与えることにもなっている。たとえば現代における新自由主義の問題を、柳田が伝承概念を練り上げていた時期に直面していた社会的な問題と比較対照することによって、システムと対置するより豊かな伝承概念の探究が可能になるのではないだろうか。

また、システムを巨大な構造として設定するのではなく、微細なシステムという仮説を設定しながら探究することで、より豊かな生活世界の成りたちが捉えられるようになるのではないだろうか。日常生活の分析をとおしてシステムとは何かと問い続けることで、本論文の考察内容は一層深まることが期待される。

継続的な追跡調査を実施することで、伝承を包摂する生活世界とシステムは重なり合って存在していることと、そのせめぎ合いとを検証していくことが今後の研究課題であろう。

これらの課題が残されてはいるが、本論文は民俗学の対象としての「伝承」概念について、柳田の「伝承」論にまでさかのぼり、本来有していた「自治」との関わりを明らかにしたことに加えて、システム化が進行する現代社会において、「生活世界」を「自律性をもった『共』の場」としうる可能性を示した点で、高く評価されるものである。

総じて、民俗学の根本概念である「伝承」の可能性に真摯に取り組んだ、学位請求論文に相応しい内容であると評価する。